

## 子どもにおける助詞「は」「が」の獲得の研究

秦 野 悦 子\*

### 問 題

子どもの初期二語発話は、成人の文法体系で機能語\*\*に属する語類が欠如した、いわゆる電報文といわれるものである。これは多くの言語に共通した特徴といえる。この場合子どもは、それぞれの成人言語に準じた一定語順（ほとんどの幼児が用いた語順は、主語—動詞、動詞—目的語、という関係である。）を用いて、基本的意味関係を表わしている。

成人が使用する言語の語順が比較的自由的な、日本語という環境に育った子どもでも、初期二語発話期には、「主語—述語」「目的語—他動詞」という語順関係を示すことが多い（宮原、宮原、1973）。

日本語で主格と目的格を表わす格標識\*\*\*は、「は」と「が」および「を」であるが、子どもの初期の文法の中に、これらはまだ出現しない。しかしながら語順が一定であるという事実から、既にこの時期の子ども達は、これらの基本的な主格、目的格の関係を成立させているものと推定される。

日本語では、多くの助詞が1音節から成り、それぞれが意味を荷っている。助詞のひとつに、話題提示として、名詞（句）を取り立て強調させる働きを持つ提題助詞「は」がある。この助詞が文中の主語を取り立てる時に、「は」は提題と、主格の双方の機能を荷うのであるが、こういった場合において、主格助詞「が」との異同や使い分けが問題になっている。

本研究では、日本語の基本的音韻を習得しおえたといわれる3～4歳児から、就学後の6～7歳児までの、いわゆる言語獲得途上にある子どもを対象に、この2つの助詞「は」「が」の使用、および文中での意味理解とい

う問題を実験的に取り扱って、検討してみようと思う。そして、得られた発話資料の分析により、この2つの助詞「は」「が」が、子どもの生活年齢に応じて、子ども自身の発話内でどんな役割を果たしているのかを吟味し、その使用上の変化から、助詞の獲得、発達過程を明らかにする。さらには、子どもが何歳頃に「は」と「が」を状況に応じて使い分け、成人が使用する配列原理に到達しうるかを知るための資料を得る事をねらいとする。

まずここで、発達という観点から模倣を扱った従来の研究を紹介し、あわせて子どもの発話能力抽出のひとつの方法として、本研究で模倣再生という手続を用いた理由を述べたい。Chomsky (1957, 1965) は、言語獲得の対象となるものは、観察される発話ではなく、それらの発話の基底に隠れている文の構造であるから、模倣による言語獲得はありえない、と主張している。

Ervin-Tripp (1964) は、1歳10か月から2歳10か月の5児を対象に、模倣発話と自発発話の語順を比較し、自発発話で用いる彼ら自身の規則が、彼らの模倣発話にどのくらい反映しているかを調べた。もし、成人の手本発話に対する模倣が自発発話より進んでいけば、つまり、自発発話より複雑な文を発話できるならば、言語獲得における模倣の役割が示唆されるのであるが、結果としては、自然発話と模倣発話間の発達水準差は認められなかった。

Brown & Fraser (1963) は、2歳1か月から、2歳11か月の6児に対して行った模倣実験から、手本発話を模倣した文の長さは、自発文の平均の長さと同様である、との結果が得られた。

確かに、子どもは言語獲得過程において、文の中に含まれる規則を身につけ、個々の文を自分自身の言語基準に照らして、正誤判断するように思われる。そしてこの言語基準は年齢とともに出現し、子どもの側の言語に関する自己意識（すなわち子どもが意図的に言語基準を使用すること。）の増大を示すものであると推定される。特に、幼い子どもは、記憶範囲の限界 (memory span) により、一定長さ以上の文や、複雑な文を話したり理解

\* お茶の水女子大学

\*\* 機能語……定冠詞、不定冠詞、前置詞、語尾変化、接続詞、連結詞。

\*\*\* 格……格は、名詞句の述語動詞に対する関係を表わす概念である。そして、どの名詞句が主語になりうるかという事が、格の間の階層的関係によって予想可能である、という利点をもつ。

したりする事に制約を受けるだろうと、容易に想像される。

Menyuk (1963) によると、幼い子どもは、喚起された模倣において、成人のモデルに接近するというより、子ども自身の規則を用いる傾向がある、という事を提言している。Bloom 等(Bloom, L. et al, 1974)の研究で対象にされた6児についても、子どもは、自分自身の自発発話でまったく生じないような新しい語や構造の模倣をしない事が確かめられた。他の実験研究(Miller & Ervin, 1964, Slobin & Welsh, 1973)からも、同様の結論が支持されている。

Slobin (1968) は Brown & Bellugi (1964) の拡充模倣に対する子どもの模倣型研究が示す結果を解釈して、子どもは自発能力を超えない限り、少なくとも彼らの限界まで模倣再生が可能であろう、と述べている。

そこで、上述のような彼らの論理を受け入れるならば、模倣手続を用いて喚起された子どもの助詞「は」「が」の使い分けに、次のような発達レベルを予測することができる(仮説)。

まず、最も稚拙な水準の子どもは、提示した課題文に無関係な発話反応を行うだろう。Brown & Bellugi (1964) のいわゆる pop go weasel effect\* で如実に示されるように、提示文の意味関係が理解されない段階であると考えられる。

次に、2つの助詞のどちらも使用できない子どもは、雑音が挿入された不完全文に\*\*についても、成人の使用する完全文に\*\*\*についても、助詞を欠如した単語連鎖反応を示すだろう。この水準では、助詞使用がなされないという点で第1水準と同じであるといえるが、少なくとも無関係発話以外の模倣要素が出現するであろう。

さて、次の第3水準では、「は」「が」の使用は行われるが、不完全文に対して、2つの助詞の使い分けに一貫性がない乱用とか、他の助詞を使用する誤用反応が見られるだろう。一方、完全文に対しては正しい模倣反応が見られるだろう。何故ならば、子どもの自由発話で通常用いていない助詞でも、どこかで自発的に用いた経験があれば、それを使う自発能力を持っていると解釈されるので、模倣実験というかなり強制された事態においては、出現が期待できるであろうと思われる。最後に、2つの

助詞を正しく使い分けができる第4水準の子どもは、当然の事ながら、不完全文に対しても、完全文に対しても、一貫した使い分け基準により発話模倣を行うであろう。

以上述べた「は」「が」の使い分けにあたっての子どもの反応水準を生活年齢との関連で発達的に明らかにすることを目的とする。

また第4水準の子どもの使い分け基準が、成人の行う「は」「が」の使い分け基準に添って正しく使用できるようになる概略的時期を検討する。

さらに、次に述べるような成人の使用法における2つの特徴的現象が、先に仮説で予測した発達水準の各期においてどのように反映されるのかを明らかにする。

ひとつは、旧情報\* (話し手と聞き手の間に共通理解されている話題：既出の話題) を伝える助詞「は」を含む「名詞(句) + は」は、省略される傾向があるという特徴である。

もうひとつは、提題助詞と主格助詞を含んだ「名詞(句) + は + 名詞(句) + が + 述部\*\*」という文型は、日常の習慣的発話として、使用頻度が高いという特徴である。これら2点について吟味する。

## 方 法

### 被験者および実験期間

鎌倉市内の保育園、幼稚園、小学校に所属する3歳0か月児から7歳5か月児計80名である。TABLE 1 に示すように年少、年中、年長、小1の4群に分ける。各群とも男女同数で、計20名より成る。実験は、1975年7月から9月にかけて、すべて個別に実施され、ひとり当りの所要時間は約20分である。

TABLE 1 被験者の構成

年齢区分	年 齢 幅	年齢平均	中央値	人数	
				男	女
年少	3歳0か月～4歳4か月	4歳0か月	4歳1か月	10名	10名
年中	4歳5か月～5歳5か月	5歳1か月	5歳1か月	10名	10名
年長	5歳6か月～6歳3か月	6歳0か月	6歳1か月	10名	10名
小1	6歳6か月～7歳5か月	7歳1か月	7歳2か月	10名	10名

\* 2歳児 Adam は成人の手本発話に対して、すべて pop go weasel と発話したことから名付けられた。

\*\* 本来「は」あるいは「が」が入ると完全な文となる位置に雑音を挿入した文(雑音挿入文)を不完全文と呼ぶ。

\*\*\* 何の欠落操作も加えていない文を完全文と呼ぶ。

\* 旧情報は old information (Chafe, W. L., 1970) の訳語それと対をなす言葉 new information を新情報と訳す。

\*\* 「名詞(句) + は + 名詞(句) + が + 述部」を以下「XはYがP」と記すことがある。ABSTRACT では「S(NorNP) + wa + (NorNP) + ga + Pred.」と記す。

実験材料

子どもの身近な事柄を題材にするよう配慮して、不完全文、正常文を片寄らないように配列し、TABLE 2のような28文より成る課題文を構成した。課題解決の手掛りとして、同時に提示した文意を表わす絵カードは、18cm×13.5cmの白ボール紙に描かれたもので、1枚につき平均3課題文が含まれ、計9枚から成る。絵カードI、II、III、に該当する絵および課題文は、筆者が任意に作

TABLE 2 提示した材料文の構成(注)

絵カード番号	課題番号	材 料 文
I	1.	象□鼻 <input checked="" type="checkbox"/> 長い。
	2.	きりん <input checked="" type="checkbox"/> 首□長い。
	3.	蛇□体 <input checked="" type="checkbox"/> 長い。
II	4.	この絵 <input checked="" type="checkbox"/> 少し変ですね。
	5.	猫より大きいねずみ□います。
	6.	普通猫より大きいねずみ□いません。
III	7.	この絵 <input checked="" type="checkbox"/> 少し変ですね。
	8.	猫を追いかけているねずみ□います。
	9.	普通ねずみ□猫を追いかけません。
IV	10.	大きなお口をあいた太郎ちゃん。
	11.	太郎ちゃん□歯 <input checked="" type="checkbox"/> ぐらぐらです。
	12.	もうじき抜けそうだな。
V	13.	おいしそうなお菓子です。
	14.	でも甘い物に <input checked="" type="checkbox"/> 砂糖□たくさん入っています。
	15.	砂糖□虫歯のもとになります。
	16.	甘い物をたくさん食べてはいけません。
VI	17.	歯を磨いている太郎ちゃん。
	18.	歯□歯ブラシで磨いてきれいにしましょう。
	19.	特に寝る前に忘れずにしましょう。
VII	20.	鏡の前で大きな口をあいてみてごらん。
	21.	前歯□薄くて奥歯□平らです。
	22.	歯の形 <input checked="" type="checkbox"/> みんな同じではないのです。
VIII	23.	肉を食べる動物の絵です。
	24.	狼とワニ <input checked="" type="checkbox"/> 歯□鋭く尖っています。
	25.	肉を食いちぎるためですね。
IX	26.	牛の食べ物 <input checked="" type="checkbox"/> 草です。
	27.	牛の歯□平らでねず。
	28.	この平らな歯で草をかみます。

(注) □……テープの中で雑音挿入箇所  
……テープの中で「は」が発音される箇所  
……テープの中で「が」が発音される箇所

成し、IV~IXの原型は「スターターブック、24、歯(Tooth)」を採用し、修正して用いた\*。

課題文は比較的ゆっくりと明瞭に聞こえるよう留意してテープレコーダーに吹き込まれた。雑音挿入の不完全文で使用した雑音は、鉛筆2本を叩き合わせた音で1拍分の長さである。テープの人声よりもやや小さいが、それとは別種の音であることが、認められる。

実験手続

「絵を見せながらその絵のお話しをします。ひとつ聞き終わったらすぐにまねをして下さい。だけど！\*\*という音の聞こえた所は、その代りに何か入れて、正しくなるようにまねをして下さい。」との教示のもとに、被験者はテープに吹き込まれた雑音挿入課題文および完全文を聞き取り、直後模倣再生を求められる。

課題解決の手掛りとして、聞き取りおよび再生の際、文意を表わす絵カードを同時に提示する。尚、被験者の言語反応はすべてテープレコーダーに吹き込まれる。

導入課題として、「ウサギは耳□長い。」「ウサギ□耳が長い。」を行い、やり方がわからないような場合、もう1度最初から教示を繰り返し、手続を確認させる。

被験者の反応は、TABLE 3の9段階の基準により評価される。ガ、ハ、欠如、部分、の4つの反応型は、逐語再生が行われるものとみなし、意味、無関、要素、無発、他、の5つの反応型は、逐語再生レベル以下とみなす。また TABLE 2に示した課題文は、その性質により5グループに分類整理される。分類グループと、そのグループ分けの基準は TABLE 4に示す通りである。

TABLE 3 反応型の評価基準

反応型	基 準：反応例
逐語再生	ガ 「が」が発音される：牛の食べ物 <input checked="" type="checkbox"/> 草です。 ハ 「は」が発音される：牛の食べ物 <input checked="" type="checkbox"/> 草です。
部分再生	欠如 雑音挿入箇所のみ欠如：牛の食べ物/草です。 部分 部分的脱落：猫より大きいねずみ――。
逐語再生不可	意味 意味は正しくとれている：このねずみ猫より大きいね。 無関 無関係発話：ねずみは猫が大嫌いでしょう。 要素 要素のみ発話：猫/ねずみ 無発 発話しない：――。 他 挿入箇所に「は」「が」以外の助詞を入れる。

\* 使用した本は、英国マクドナルド社4~7歳児用絵本シリーズ全30巻のうち第24巻である。高村喜美子訳。1972、鶴書房盛光社

MACDONALD STARTERS/London 24, Teeth

\*\* 実際に雑音を聞かせる。

TABLE 4 課題の分類基準

分類	該当する課題番号：予想反応とその理由
G <sub>1</sub>	5, 8, : 雑音挿入箇所「が」を入れるのが自然であるような文。聞き手に対して新情報（未知の情報）である。また現象とか眼前の事実描写である。
G <sub>2</sub>	6, 9, : 雑音挿入箇所「は」を入れるのが自然であるような文。聞き手に対して旧情報（該当文提示前に既に話題となっている）である。また、判断とか固定した観念の叙述である。
G <sub>3</sub>	4, 7, : 雑音挿入の操作がされていない完全な文であるので文中に使われた助詞「は」の模倣が予想される。
G <sub>4</sub>	1, 3, : 「は」が入ると予想される。1と3は「X 11, □YがP」型文である。この種の型の文では、「X」が特に強調されない限り、「XはYがP」と発話され易い。更に11, では「太郎ちゃん」が旧情報である。
G <sub>5</sub>	2, 14, : 「が」が入ると予想される。「XはY□P」型文であり、「Xは」提題（話題提示）である。特に強調とか、対比関係を扱うような文脈が無い限り、「XはYがP」と発話され易い。（注）

(注) 強調, 対比関係を示す例  
 太郎は体が大きい。太郎は気が小さい。  
 太郎は（体が大きい）が、気は小さい。  
 太郎は体は大きい（が、気は小さい）。  
 太郎は体は大きい（が）が、気は小さい。

結 果

提示課題のうち、不完全文では雑音挿入箇所、完全文では「は」「が」使用箇所における被験者の反応を TABLE 4 の課題分類に従って分析する。ただし、TABLE 2 の課題文中、分析の対象となったのは、課題番号 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 14, 15, 22, 24, 26, 27の計16文である\*。

TABLE 5 は、課題分類別に子どもの反応型を示したものである。

1. G<sub>1</sub>群では各年齢とも「ガ反応型」が優勢である。

\* 課題10, 12, 13, 16, 17, 19, 20, 23, 25の9文は該当助詞が存在しない。

課題18は得られたデータが音的に判別しにくいものが多いので分析から除外する。課題21は新情報（未知の情報）と解釈すれば「が」が入るし、対比関係として捉えると「は」が入るといように、一義的予想は不可能な課題である。スタイルとしては、「X□P, Y□P」型となる。課題文の持つこのような特殊性のため、助詞欠如反応が非常に多く出現したので分析から除外する。

TABLE 5 課題分類別反応型出現率 (%)

分類	年齢	ガ	ハ	欠如	部分	意味	無関	要素	無発	他	
G <sub>1</sub>	小1	80	5	7.5	0	5	2.5	0	0	0	
	年長	65	2.5	32.5	0	0	0	0	0	0	
	年中	55	2.5	22.5	12.5	7.5	0	0	0	0	
	年少	29	0	23	15	20	8	5	0	0	
G <sub>2</sub>	小1	12	72	15	0	0	1	0	0	0	
	年長	3.7	37.3	50	4.5	0	0	4.5	0	0	
	年中	5	33.8	48.7	5	0	2.5	0	0	5	
	年少	7.7	19	39	12.7	1.3	14	0	1.3	5	
G <sub>3</sub>	小1	0	95	0	0	0	3.75	0	1.25	0	
	年長	0	87.5	7.5	0	1.25	3.75	0	0	0	
	年中	1.25	73.7	7.5	1.25	0	5.5	2.5	5.8	2.5	
	年少	2.5	67.5	5	0	0	8.75	8.75	7.5	0	
G <sub>4</sub> (注)	1.	小1	1.7	75	18.3	5	0	0	0	0	0
		年長	1.7	33.5	55	8.3	0	0	0	1.7	0
		年中	1.9	15	75	8.3	0	0	0	0	0
		年少	3.2	1.7	67	18	1.7	0	5	1.7	1.7
	2.	小1	100	0	0	0	0	0	0	0	0
		年長	98.3	0	0	0	0	0	0	1.7	0
		年中	100	0	0	0	0	0	0	0	0
		年少	91.7	1.7	0	0	1.7	0	4.9	0	0
G <sub>5</sub>	1.	小1	0	95	3.3	0	0	0	0	0	1.7
		年長	1.7	85	8.3	0	0	0	0	0	5
		年中	0	81.7	3.3	5	0	3.3	0	1.7	5
		年少	3.2	53	10	11	1.7	18	1.7	1.7	9.7
	2.	小1	81.6	1.7	13.3	0	1.7	1.7	0	0	0
		年長	68.3	0	18.3	5	5	1.7	0	0	1.7
		年中	53.3	1.7	23.3	5	0	6.7	3.3	1.7	5
		年少	43.2	0	31.7	1.7	1.7	11.7	3.3	5	1.7

(注) G<sub>4</sub>, G<sub>5</sub>は□が2か所出現するので、最初の□を1, 2番目の□を2, として記す。

正答率（ガ反応）は年中と年少間に有意差 ( $\chi^2=6.24, df=1, P<.005$ ) が認められる。従って、年中以上の子どもは、新情報や現象、眼の前で生じる事実描写に関して、主格に「が」使用をする事が示された。就学期を境に助詞欠如型が激減する。さらに、他の年齢ではほとんどみられない現象であるが、年少における特徴として、課題文の意味理解はできても課題文に添った模倣をせず自己流に表現する者が20%みられる。具体例を以下に示す。

提示文——猫より大きいねずみ□います。

反応文——猫より大きいねずみです（小1 2名）。

猫が小ちゃい、ねずみが大きい（年少 1名）。

猫よりねずみの方が大きい(年少 2名)。また、年少における部分的脱落箇所を調べると、3/4が述部欠如である。

例 提示文——猫より大きいねずみ□います。

反応文——猫より大きいねずみ(3名)。

2. G<sub>2</sub>群では、各年齢とも「ハ反応型」が優勢である。正答率(ハ反応)は、小1と年長( $\chi^2=19.9$ ,  $df=1$ ,  $P<.005$ ), 年中と年少( $\chi^2=4.65$ ,  $df=1$ ,  $P<.05$ )で有意差がみられる。

旧情報(該当文提示前に既に話題となっているもの)の記述、話者の感情が加わるような判断の記述、(例:この犬はなんて大きいのだろう)、一般に固定した観念の記述(例:地球は丸い)に関しては、小1以上で74%近くの子どもが「ハ反応」を示し、就学前後を境にこの傾向が著しく増大する事が明らかになった。

年長、年中とも50%が助詞欠如であり、これは、就学前児の一般的傾向といえる。年少児の反応は多様で、助詞の誤用(「を」「に」「ね」を挿入した意味の通じない発話)がみられる。その上、他の年齢群に較べ、無関係発話が多く(14%),これは提示文の意味理解がなされない事の裏付けであると思われる。

各年齢を通じて、部分的脱落の脱落箇所を検討すると3/4以上が主格、つまり「名詞(句)+は」が脱落している事が認められた。具体例は次のようなものである。

課題9. 提示文——普通ねずみ□猫を追いかけません。

反応文——普通猫を追いかけません。(年長3名, 年少5名)。

課題15. 提示文——砂糖□虫菌のもとになります。

反応文——虫菌のもとになります(年中1名, 年少2名)。

この結果は目的で述べたように旧情報を伝える「は」を含む「名詞(句)+は」が省略され易いという性質の表われかもしれない。あるいは、課題文が長すぎるので、彼らの認知範囲内に入らず、脱落したものとも考えられる。しかしG<sub>3</sub>群と他の条件が一定で「名詞(句)+が」の場合(G<sub>4-2</sub>),この脱落は生じない。従って、やはり、「は」が省略され易いという性質の表われと考えるのが妥当であろうと思われる。確かに課題6, 9では「ねずみ」が、課題15では「砂糖」が、それぞれ旧情報である。

3. G<sub>3</sub>群は、雑音挿入操作がされていない完全文であり、提示文通りの模倣再生が予想される。正確な模倣、つまり「ハ反応」は、小1および年長でほぼ90%, 年少でも67.5%と、全般にどの年齢でも「ハ反応」に集中化する傾向がみられる。正答率(ハ反応)は年長、年中間( $\chi^2=4.84$ ,  $df=1$ ,  $P<.05$ )に有意差が認められる。

TABLE 6 G<sub>3</sub>群で「は」再生する所を「が」反応した3名の被験者について「は」「が」使用の実態

	A児	B児	C児
完全文 は 模倣	×	×	×
完全文 が 模倣	○	○	○
不完全文 は 模倣	×	×	○
不完全文 が 模倣	×	×	○

従って、ほぼ年長以上で正確な模倣再生結果が得られた、といえる。

またこの課題は、「名詞(句)+は+述部」型の正常文模倣であるから、使用水準の低い子どもの反応として予想されるのは、助詞を欠如した単語連鎖型であろうと思われる。ところが、「ガ反応」を示した者が、年中で1名、年少で2名いた。この事実は、低年齢の子どもが「ハ反応」「ガ反応」を意識的に使い分けた結果生じたものと考えよりむしろ、「が」の方が習得が早く、「は」を「が」で代用する時期があり、この3名の被験者は、そのような過渡的段階にいるものと推測されるのである。そこでこの3名の被験者についてG<sub>3</sub>群以外で得られた資料を詳細に検討してみることにする。

TABLE 6\*からだいたいの傾向を知ることができる。まず年少A児は、助詞使用レベルがきわめて低い状態であり、完全文模倣(G<sub>3</sub>群)では「は」使用をせず、無関係要素、欠如、反応をする。雑音挿入の不完全文模倣(G<sub>1</sub>群, G<sub>2</sub>群)でも意味、欠如、反応をする。次に、年少B児は乱用状態であり、完全文模倣(G<sub>3</sub>群)で、「は」「が」使用が入り乱れ、雑音挿入の不完全文模倣(G<sub>1</sub>群, G<sub>2</sub>群)では、部分、要素、欠如、反応をする。そして、年中C児は、ほぼ使い分けができていたが、まだ不完全な状態であり、完全文模倣(G<sub>3</sub>群)で、1か所だけ「が」使用がみられた。以上、「は」で再生されるべき所を「が」で表現した、過渡的段階にあると思われる被験者3名の助詞使用水準を明らかにした。

このほかにG<sub>3</sub>群の特徴的反応を探すと、一般に低年齢ほど逐語的再生レベルが低くなり、多様な反応が出現することがわかる。

4. G<sub>4</sub>群の課題は、「X□YがP」型文である。「X□Y」の雑音挿入部分は、「ハ反応」が優勢となる。「ハ反応」は、小1と年長( $\chi^2=20.9$ ,  $df=1$ ,  $P<.005$ ), 年長と年中( $\chi^2=6.39$ ,  $df=1$ ,  $P<.01$ )で各々有意差が認められる。従って、年齢が高い程明らかに「は」使用が

\* 完全文, 不完全文, は模倣, が模倣, の組みあわせ条件

TABLE 7 完全文模倣課題における「は」「が」出現率 (%)

	小1	年長	年中	年少
ハ反応 G <sub>3</sub>	95	87.5	73.8	67.8
G <sub>5</sub>	95	85	81.7	53
ガ反応 G <sub>4</sub>	100	98.3	100	91.3

TABLE 8 「X□YがP」型課題についての発話内容 (%)

	課題番号	小1	年長	年中	年少
XはYがP	1.	85	50	20	0
	3.	75	45	10	5
	11.	65	5	10	0
	平均	75	33	13	1.67
XがYがP	1.	0	5	0	5
	3.	5	0	0	5
	11.	0	0	0	0
	平均	16.7	1.67	0	3.3

TABLE 9 「XはY□P」型課題についての発話内容 (%)

	課題番号	小1	年長	年中	年少
XはYがP	2.	75	65	55	25
	14.	90	60	60	20
	24.	75	55	20	15
	平均	80	60	45	20
XがYがP	2.	0	0	0	0
	14.	0	0	5	0
	24.	5	0	0	0
	平均	1.67	0	1.67	0

増大すると言えるが、低年齢では助詞欠如反応が多くみられる。「は」使用は、年中ではまだほとんどできず、小1になると75%の者が使用している。以上より、不完全文の「ハ反応」は G<sub>2</sub>群と G<sub>4</sub>群で同じような発達傾向を示すことが判る。

「YがP」の完全文模倣部分については、「ガ反応」がどの年齢段階でも90%以上と圧倒的に集中して使われる。

次に完全文模倣課題内の比較から、模倣において「ハ反応」と「ガ反応」とどちらかが出現し易いかを調べる。TABLE 7 を一見して明らかなように、どの年齢群でも「ガ反応」の方がはるかに出現し易く、また低年齢になる程「ハ反応」の出現率は悪い、という結果が得られた。

TABLE 8 は、「X□YがP」型課題の発話内容を示し

たものである。この表から「XはYがP」型発話は、就学前児では少ないが、小1になると急速に使用が増し75%を占める。これにひきかえ「XがYがP」型発話は、どの年齢でもほとんど使用されない。

5. G<sub>5</sub>群は「XはY□P」型文である。「XはY」の完全文模倣部分について「ハ反応」は、年中と年少 ( $\chi^2 = 10.98, df=1, P < .005$ ) との間に有意差が認められる。年中以上は80%以上の「ハ反応」が出現する。TABLE 7により、この結果は、G<sub>3</sub>群の「ハ反応」と同じような発達傾向を示すことが確かめられた。「Y□P」の雑音挿入部分は「ガ反応」が圧倒的に多く発話された。

次に、提題助詞と主格助詞を含んだ「XはYがP」型文に対する子どもの使用基準を考えてみる。そこで、G<sub>4</sub>群の「X□YがP」型発話と G<sub>5</sub>群の「XはY□P」型発話で出現した助詞を比較すると、「XはYはP」型発話および「XがYはP」型発話は一度も使用されなかった。TABLE 8, TABLE 9 から明らかなように「XがYがP」型発話は、まれに使用され、「XはYがP」型発話が最も良く使われることが明らかにされた。この型の発話は、小1では75~80%出現し、低年齢程使用率が低い\*。

この結果から、「X□Y□P」型文では、該当文の前後に、特に強調とか対比関係を示すような文脈が存在しない限り、子どもの発話基準においても、成人の習慣的発話基準にて用いられる「XはYがP」型と同じものが使われている事を示唆するものである。

## 考 察

以上の実験の結果から、模倣完成課題という手続を用いて、子どもの「は」「が」の使用を捉えることができたといえる。何故ならば、完全文模倣課題において、提示された課題文が「は」発話にもかかわらず、年中、年少の子どもで「が」発話の例が見出された事である。Menyuk (1963) の指摘のように、「子どもは喚起された模倣に対しても、自己の基準に依存した発話をし」、また Bloom 等の結果が示すように、「子どもは自発能力を越えた模倣をすることができない」という立場に立って説明するならば、上述の子どもは、自発能力として「は」を持たず、「は」を「が」で代用したものと解釈される。確かに、彼らは一貫した使い分け水準以下を示した事が明らかにされた。

\* TABLE 8, TABLE 9 に示したのは「X□Y□P」の2か所とも発話された反応のみを取り扱った。残りの反応は助詞欠如がほとんどであった。

TABLE 10 「は」「が」使い分け反応水準

水準	完全文		不完全文		小1	年長	年中	年少
	が	は	が	は				
①	×	×	×	×	0人	0人	0人	6人
②	○	×	×	×	4	12	11	12
③	○	○	×	×	10	8	8	2
④	○	○	○	○	6	0	1	0

○印…できる  
×印…できない

次に「は」「が」の使い分けに際しての反応水準を考えてみる。そこで、被験者ひとりひとりの反応様式を調べて分類すると、①不完全文についてはもちろん、完全文についての模倣にも混乱がみられる群、②完全文「は」模倣課題の使用が中途半端であり、不完全文模倣については、乱用、欠如がみられる群、③完全文課題はすべて正しく反応するが、不完全文課題について、乱用、欠如、がみられる群、④成人の使い分け基準と同じ基準に基づいて反応した群、の4つのタイプに分ける事ができる。これをTABLE 10に示した。この結果を仮説との対応で検討する。

仮説で述べた最初的水準は、もう少し広い範囲で考えた方が妥当であろう。つまり、最も稚拙な水準の子どもは、提示した課題文に対し無関係な発話や、課題に反応しない無発話、また課題文中に含まれる一部の要素のみを取り出した発話を行う、と修正される。これらの反応は、年少だけにみられる特徴である。その理由としては、課題文自体の意味を理解できないか、あるいはできても記憶範囲 (memory span) の狭さによるため、逐語再生が困難になるからだろうとも考えられる。

本実験では、「が」使用が「は」使用より早期に出現し、ある時期に「が」使用のみの段階があり、次に「は」使用が加わるので、「は」使用において誤用、乱用がみられるが、「が」使用の混乱はみられない。仮説の第2番目に設けた反応水準はみられなかった。従って、2つの助詞のどちらも使用できない段階は第1水準のみであるといえる。

そこで第2水準としては、「は」「が」の使用はできないが、模倣再生という強制された事態において「が」模倣は完全に行われる段階、つまり「が」模倣は完成しているが、「は」模倣は使われ始めという段階を設けることができる。年長、年中、年少で半数以上の者が、この反応水準に含まれる。

仮説で第3番目に設けた水準は、先に述べた反応水準③、即ち「完全文課題はすべて正しく反応するが、不完

全文課題について、乱用、誤用がみられる群」に一致し、小1、年長、年中児においてみられる。

従って、仮説は支持され、第3水準の子どもは、自発語としての助詞使用は低いが、模倣実験という強制された事態では正しく反応する。故に、この段階では2つの助詞は、子どもの自発能力を越えるものではない事が示唆される。

第4水準の子どもは、一貫した使い分けに基づき、状況に応じて使用している事が確かめられ、小1においてみられる。従って、仮説で第4番目に設けた水準は支持された。こうして、子どもの反応水準を発達的に明らかにした。

そして、第4水準における使い分けは、すでに成人の使い分け基準と一致することが認められた。就学期以降にこの関係が把握されるものと推定される。

さて次に、「が」使用の発達と「は」使用の発達を対比的に考察してみる。年少児に限って言えば、雑音挿入の不完全文で「が」が期待されるとき「ガ反応」は29%、完全文模倣課題で「が」が期待されるとき「ガ反応」は90%以上の使用がみられた。一方、年少児の「は」については、不完全文で1.7%、完全文で53%の使用がみられた。ここでも、Slobin (1968) の考え、つまり子どもの自発能力を越えない限り、少なくとも彼らの限界まで模倣再生が可能である事、を受け入れて解釈すると、「が」使用は、比較的早期に出現し、年少でもある程度使用が認められる。また使用傾向は、加齢に伴ってゆるやかに増大し、しだいに安定して使用されるようになる、と言える。それに対して、「は」使用は、「が」使用より遅く現われ、一般に就学前児では、雑音挿入の不完全文に対して助詞欠如反応が圧倒的に多く、就学後に「は」使用が急速に形成される。

就学期を境とした助詞欠如の激減、あるいは「は」使用急増に関するひとつの解釈としては、就学後に行われる組織的な書き言葉習得訓練の影響が大きいのではないかと考えられる。その結果、従来子ども自身の保持していた発話能力が、より統合されるものと思われる。

次に、成人の使用法においてみられる旧情報を伝える「名詞(句)+は」の省略傾向が、子どもではどの位生じるのか検討する。

TABLE 4の分類基準に従うと、G<sub>1</sub>群、G<sub>2</sub>群は同形態の雑音挿入不完全文として、被験者に提示される課題である。そこで、この2群の助詞欠如を比較すると「が」が期待されている時よりも、「は」が期待される時の方が、助詞欠如が多く出現する。もし、「は」に省略性質が無いのならば、それぞれの助詞について同程度の助詞

欠如が出現するはずと思われるので、確かにこの期の子どもにとっても、「名詞(句)+は」は既知情報の省略化として用いられるものと推定される。

また一方では、子どもにおける「X□Y□P」型発言も「XはYがP」型発話がほとんどであった事から、これも成人の使用基準に一致している事が認められた。しかし、日常の自然発話でこの型の文がどの位使用されるのかをさらに検討する必要がある。

最後に、従来の観察による発話事例研究から「は」「が」に着目すると次の事が明らかになる。まず、助詞の中でも「は」「が」は、比較的早く出現する。また初出時期はまちまちであり、「は」と「が」が、ほとんど同時に出現する子どもがいれば、「は」が先の子ども、「が」が先の子どももいる。しかし、1歳6か月から2歳10か月頃の間には双方の助詞の初出が認められる。このように、助詞が出現し、誤用、乱用を繰り返して、安定した使用に至るまでいかに長い年月を終るかが明らかになった。

以上で、「は」「が」の使い分けにあたっての子どもの反応水準を発達的に捉え、さらに成人の行う「は」「が」の使用上の特徴が、発達水準の各期でどのように取り扱われているかを明らかにする、という目的は達せられた。しかし、助詞使用が急増する時期については、もう少し検討の余地がある。そこで、特に助詞初出直後とか、就学前後の個人内の発話の変化などに焦点をあてた研究が今後の課題とされる。

## 要 約

3歳から6～7歳のいわゆる就学前後期の言語獲得途上における子どもについて、提題助詞「は」、および主格助詞「が」の使用と文中での意味理解を、模倣完成課題を用いて研究した。

聴覚刺激として雑音挿入の不完全文(18文)と、操作を加えていない完全文(10文)を用い、課題解決の手掛りとして、補助的に絵カード(9枚)を提示した。被験者に文の直後模倣再生を求めた。

主な結果は次のようなものである。

- 1, 「が」は「は」より早期に習得され、「は」の正しい使用は就学後の子どもに認められる。
- 2, 6才以上の子どもは、旧情報や、人の感情とか情緒が加わる判断の記述、また、一般に固定した観念の描写の際に、「は」使用を行う。
- 3, 4才以上の子どもは、新情報や、現象の記述、また、眼前描写の際に「が」使用を行う。
- 4, 「は」「が」の習得水準として、次のような段階

が示唆される。

水準1: 課題文の意味をまったく理解しない段階、つまり、無発話だったり、課題文と無関係な発話をしたり、課題文中の一部の要素を取り出して発話する段階である。

水準2: 完全文課題が与えられた場合「が」使用はできるが、その他の場合、助詞欠如、乱用をする段階である。

水準3: 完全文課題が与えられた場合、「は」「が」の使用はできるが、不完全文課題では、助詞欠如、乱用、をする段階である。

水準4: 2つの助詞を一貫した使い分け基準により使用できる段階である。またこれは、成人の使い分け基準と一致している。

5, 「名詞(句)+は+名詞(句)+が+述部」型文は子どもにとっても日常生活で習慣的に使われている型だと認められた。また、旧情報を伝える時、「名詞(句)+は」の省略傾向は、子どもにおいても認められた。

## 文 献

- Brown, R. W., & Bellugi, U. 1964 Three processes in the child's acquisition of syntax. *Harvard Educational Review*, 34, 133-151
- Brown, R. W., & Fraser, C. 1963 The acquisition of syntax. In C. N. Cofer & B. S. Musgrave (Eds.), *Verbal behavior and learning*. Mc Graw.
- Bloom, L., Hood, L., & Lightbown, P. 1974 Imitation in language development: If, when, and why. *Cognitive psychology*, 6, 380-420
- Chafe, W. L. 1970 意味と言語構造, 大修館
- Chomsky, N. 1957 *Syntactic structures*. Mouton.
- Chomsky, N. 1965 *Aspects of the theory of syntax*. M. I. T. Press.
- Ervin-Tripp, S. M., & Miller, W. R. 1964 The development of grammar in child language. In R. Brown & U. Bellugi, (Eds.), *The acquisition of language*. Monographs of the Society for Research in Child Development.
- Ervin-Tripp, S. M. 1964 Imitation and structural change in children's language. In E. H. Lenneberg (Eds.), *New directions in the study of language*. M. I. T. Press.
- Menyuk, P. 1963 Syntactic structures in the language of children. *Child Development*, 34, 407-422
- 宮原英種・宮原和子 1973 アメリカにおける幼児言語の研究動向——2語発話の初期文法を中心として、



心理学評論 vol. 16, No. 1, 18-40

Slobin, D. I. 1968 Imitation & grammatical development in children. In N. S. Endler, et al. (Eds.), *Contemporary issues in developmental psychology*. Holt.

Slobin, D. I., & Welsh, C. A. 1973 Elicited imitation as a research tool in developmental psycholinguistics, In C. A. Ferguson & D. I. Slobin (Eds.), *Studies of Child language development*. New Yo-

rk : Holt.

(1978年4月28日受稿)

### 付 記

本論文は昭和50年度に、お茶の水女子大学人文科学研究科に提出した修士論文の一部を再考して修正したものである。本稿をまとめるにあたって、お茶の水女子大学、藤永保教授、同、内田伸子講師より貴重な示唆をいただきました。記して感謝の意を表します。

## ABSTRACT

### A STUDY OF CHILDREN'S ACQUISITION OF PARTICLES

#### *wa* AND *ga* IN JAPANESE

Etsuko Hatano

The purpose of the present experiment was to examine children's usage of the particles *wa* and *ga* in Japanese sentences.

Subjects were eighty children from 3:0 to 7:5 years old.

Two kinds of sentences—complete and incomplete sentences were presented to all subjects by taperecorder as audio stimuli with supplementary visual (picture card) stimuli.

A complete sentence referred to a regular grammatical sentence, and an incomplete sentence lacking of *wa* and *ga* in a sentence in spite of its ordinary requirement in Japanese language.

Then, subjects were asked to repeat the complete sentence after each representation of stimuli.

Representation stimuli were composed of 10 complete sentences, 18 incomplete sentences, and 9 picture cards.

The results of the present study suggest :

- (1) that appearance of *ga* in children's language behavior was antecedent to that of *wa* and correct usage of *wa* was possible only after preschool age.
- (2) that above 6 year-old children were capable of using *wa*, when the task sentence contained *old information* (Chafe, W. L., 1970), or description of a judgement or an idea in terms of personal feeling or emotion.

- (3) that above 4 year-old children were capable of using *ga*, when the sentence contained *new information* (Chafe, W. L., 1970), or description of a situation or a phenomenon.

- (4) that the level of acquisition of particles *wa* and *ga* was summarized as follows :

level-1) Children could not understand the meaning of the sentence at all. They gave no utterance, or gave irrelevant utterances, or else uttered only one word by picking it up from the given sentence.

level-2) Children could use only *ga*, when a complete sentence was given as a task. They could not use *wa* properly at all.

level-3) Children could use both *ga* and *wa*, when the task was a complete sentence.

level-4) Children could use both *ga* and *wa* correctly regardless of this kind of given sentence—complete or incomplete.

- (5) that “{S(N or NP)} + *wa* + (N or NP) + *ga* + Pred.” pattern in Japanese sentence formation was considered to be a natural pattern of utterance not only in adults but also in children's language behavior, and that children knew the habitual usage of omitting (S+*wa*) part when the sentence transmitted *old information*.